

家庭教育の昭和史とともに生きる—宮原小治郎小伝

第二部

『家事及裁縫』とともに (5)

佐々木 享

(名古屋大学教授)

東奔西走、旺盛な執筆

宮原小治郎は、本連載第一部でも述べたように、文章を草して発表することを好み、また格別に旅を好んだ。この傾向は『家事及裁縫』創刊以後は一層旺盛になり、このいわば自分の雑誌への執筆は、創刊以来十五年間に千二百余篇に上ったという(『回顧十五年』の「序文」)。この間発行された雑誌は一九〇冊ほどだから、一号平均六編余となる。いささか過大の感があるけれども、同一号に筆名を使いわけて書いた場合が少なくないし、主幹としてほとんど毎号執筆した巻頭言や編集後記、大小いわゆる埋め草記事を加えるとのぐらゐの数になっていたかもしれない。その大部分は家事・裁縫教育に関する論説・解説で占められていた。叙情的紀行文も

ないではなかったが、それは、家事・裁縫教育に関する探訪旅行途上のいわば副産物にすぎなかった。

還暦を過ぎてなお東奔西走する小治郎は、一九二九年六月には、京城で開かれた全国高等学校校長会議の傍聴にこと寄せて、帰国後初めて朝鮮を訪ねた(第三卷第十一号)。そのほか、彼はその足跡を『家事及裁縫』誌に書き遺しているのので、試みにその歴訪先を第四、五卷(一九三〇、三二年)から拾い上げてみると、富山(第四卷一第二号)、静岡(四一四)、仙台(四一七)、朝鮮(四一四、五一、二、三)、群馬(五一四、八)、博多(五一五、六)、長崎(五七七)、新潟(五一一〇)などがある。これらはおそらく全部ではないであらう。ちなみに、帰国後の朝鮮訪問は二度目である。飛行機や新幹線の便のある時代ではない。その衰えを知らぬ健脚ぶりは目をみはらせるものがある。

裁縫科教師軽視への怒り

ところで、当時の教育界には裁縫科教師を一段低く見る風潮があり、それは、女教師の間にさえあった。例えば、小治郎は一九三二(昭和七)年五月第一二回小学校教員大会にいま見られたその状況の一端を、次のように書き記していた(第六巻第六号、二〇一頁)。

「昨日来口を開けば曰く、私は専科ではありませんがと、これ等の言葉の裏面には、何となく裁縫を担任してゐない

ことを誇りとしてゐるらしい。裁縫科は専科がやればよいといふ冷淡味が漂つてゐるらしい。技能的教科を受持つことを卑下してゐるらしい。

それかあらぬか、研究問題中一番振はなかつたのは裁縫問題であつた。意見の発表の時に於て然り、況んや調査報告の審議討論の如き、実に平々担々何等の波瀾も起らねば、何等の風雲も動かないのである。会員曰く私は裁縫の問題があつたから遙々上京しました。然るに研究論議の一番少ないのに落胆しました。然るに某会員は控所にて曰く、吾々本科には裁縫問題など分らない。かかる小問題をかか全国的大会に提出するのは見当違ひである……亦以て如にその氣乗りのしなかつたかが窺はれるであらう。

思ふに裁縫科は女教員にのみ与へられた教育的重大教科であるのに、これを受持つことを卑下し嫌厭してゐるのは、未だ其の教育的価値を認識しない為であらうか、抑々又これを認識してゐても、他に何等かの原因があるであらうか、吾人聊か之を怪しみ憤るものである。」

小治郎はまた、「聞くところによれば、師範卒業の所謂本科正教員は、家事裁縫を担当することを嫌ふ傾向があるのとことだ。否寧ろこの科目を受持つことを以て恥辱とまで思つてゐるとの事である」と激しい怒りを表明したこともあつた

(『回顧十年』一三〇頁、初出不明)。

専科教員の地位は低かつた

裁縫科教師の役割の重要性を論じ、それにふさわしい力量と教育実践を裁縫科教師に求め、そのために奮起を促すことは、若き日の宮原小治郎が初めて裁縫教育を論じた時以来のモチーフであつた(本連載第一部第六回参照)。

清水福市(当時東京府立高等家政女学校長)が「裁縫科教員の地位」を論じたのは(第三巻第五、六号)、おそらくこうした小治郎の意を受けてのことだったのであらう。

清水はまず専科教員の制度上の位置を説明する。専科正教員とは小学校教員中「修身国語算術国史地理以外ノ教科目ニシテ文部大臣ノ定ムル一科目又ハ数科目ヲ限リ教授スル者」を言い(小学校令第三九条)、専科正教員となるための試験科目は図画、音楽、体操、裁縫、手工、農業、工業、商業、家事、外国語である(小学校令施行規則第一一〇条)ところから、専科正教員の担当し得る科目はこれらに限られる。本科正教員と専科正教員の職務、資格に異なる点はあるけれども、国家から受ける待遇はともに判任官待遇である(明治二十四年、勅令第二一八号)。しかし、市町村立小学校長は本科正教員に限られており(小学校令第四三条)、小学校長になれないことが「専科正教員が本科正教員に比べて地位が低い様に見られる一原因かもしれない」と言う。

このほか、俸給や年功加俸が低く定められ、特に専正の年

功加俸等は准教員と同様に扱われていたという問題もあった（表1、2参照）。これらは基準額の違いにすぎないから、実際の支給額の差はもっと大きかったと思われる。「専科教員の地位が低いと見られる直接の原因は、或はこれが其の最もなるものとも察せられる」と清水は言っている。

表1 本科正教員と専科正教員の俸給の基準

職名	本 正		専 正	
	上	下	上	下
特別俸			四マデ	一六〇
一級	二八〇	二六〇	二二〇	二一〇
二級	四四五	四三〇	三〇〇	二九〇
三級	二二〇	二一〇	一八五	一七五
四級	一〇〇	九〇	七〇	六五
五級	八五	八〇	六〇	五五
六級	七五	七〇	五〇	四五
七級	六五	六〇	四〇	三五
八級	五五	五〇		
九級	四五	四〇		

表2 本科正教員と専科正教員の加俸の違い

職 名	年 功 加 俸					特別加俸	階級地	階級地
	第一次	第二次	第三次	第四次	第五次			
本 正	二四一 六〇	四二一 九六	六〇一 一三二	七八一 一六八		三六 以下	七二 以下	
専正及 准教員	二二一 二四	一四一 四二	三六一 六〇	四八一 七八		一八 以下	三六 以下	

### 女教師が多かった専科教員

その専科正教員には、裁縫科教師が多かった。

正科、専科、代用教員等を含む小学校教員の総数は、一九二一年の一八万九千余名から二五年の二〇万九千余名へと増大していた（当時の清水が利用し得た最近のデータは二五年のものだったらしい）。この間、女教師数も増加し、その比率は三二・五％から三三・〇％へとほとんど変わらなかった。換言すれば、小学校教師の三分の一は女教師だった。このうち専科正教員は二五年には一万余名おり、このうちの女教師は、七、四一九名であった。つまり専科正教員中の女教師の比率は、六八・三％である。小学校教員全体の傾向と違って「専科正教員に女教員数の多いのは此中に裁縫科教員を包含してゐる」からであり、「専科教員の大部分が裁縫科担任者」であったからである。処遇の低い専科教員だったことは、裁縫教師が低級視される要因だというわけである。

### 男女教師の優劣

裁縫教師が低く見られるのは女教師ゆえかという点について清水は、「二三を除けば大体に於て女子は男子に比べて遜色のあるのは事実のようである」、教育事業についても「男子の方が女子に比べて、概して能率が高いと見られることは否定し難い」と書いている。しかしそれは概括的な話で、「女子にも男子に優る人もいるし、凡そ教育の事業は多面的だから

ら、女子も適所に働けば能率は上がるのであって、男女「何れが優っており、何れが低級であるかといふ様なことは容易に評定し難い」とし、それゆえ、「女教師としては我々は男子には到底勝てないといふ様な、自ら低級し自ら安価視する様な考は決して持つべきものではない」、裁縫教授こそは「全く女教員の担任すべき領域であって比較的容易に且つ適任として開拓すべき分野である」と結んでいる。

#### 裁縫教授不振の原因とその克服

しかし、裁縫科教授の実情に対する不満を清水は隠していない。第三者の立場から技芸的教科目の教育を見ると、手工、図画、体操、理科等では、各教科の任務に教育的期待が加えられ、その方法には学術的根拠が置かれるようになり、その教授学習の方法、練習実験の方法の改善、進歩は著しい。翻って裁縫教授の実況はどうか。「裁縫は仕事そのものが伝統的分子が多いものであらう」。しかし「裁縫のみが旧態を脱せず、其の方法なり考へなりが、十年不変で居って、それで現代的の期待を満足させることが出来るであらうか」、「裁縫丈けが世の進歩と交渉なく、昔ながらの方法で行はれて居っては、到底児童の学習興味を向上させ、延いては生活の改善に家庭の改良に貢献することは不可能であらう」。すべては反語で語られた批判であった。

「裁縫教授の振はないのは、たしかに当事者の態度如何が

大に影響する」、「女子は一般に研究心に乏しく、製作的の才能を欠き、協力一致の力が薄く、虚心淡懐の態度で他を容るの推量がないと云はれて居るが」、「果たして然りとせば当事者は須らく大に反省して我を忘れて斯道の為に精進せねばなるまい」。

清水の論旨は、待遇に関する制度上の欠陥に説き及びながら、これを批判するのではなく、裁縫科教師自身の研鑽、精進に道を求めるに終わっていたわけである。

#### 裁縫教師養成システムの問題

清水が触れなかった論点の一つに、裁縫教師（特に小学校のそれ）の養成問題がある。永島利明はこの時期の裁縫教師は実科女学校出身者が多く、その資質上は女教員会の活動の一つの課題となっていたと指摘している（「昭和初期の県小學校女教員会における家事及び裁縫研究」『茨城大学教育学部紀要（教育学科）』第三十八号、一九八九年）。実科女学校とは実科高等女学校を言うのか職業学校を指しているのか判然としない。両方かもしれない。いずれにせよ小学校の「裁縫」「家事」教育の担い手供給構造の解明は後れている（わずかに常見育男「昭和二十年以前の家庭科教員の歴史―小学校の裁縫科と家庭科教員の調査を中心にして」『家庭科学』第七十一集、一九七七年、が知られている）。ここでは重要な研究課題を指摘するにとどめよう。